

生きることわざまんだらより

〈内がことわざです。ことわざはみな、庄司和晃先生監修の『子どもことわざ辞典』ことばはともたち』(講談社1999)のものを用いました。(送りがなは少し変えました。ことわざの詳しい意味や使いかたはこの辞典にて調べてください。お友だちの創作ことわざや絵もごっぴいのっている楽しい辞典です。

なあ、みなさん。生きることわざのまんだらですよ。まんだらとは、大切なことをまとめて表すものです。

論理

〈北に近けりや南に遠い〉〈犬が西向きゃ尾は東〉〈雨の降る日は天気が悪い〉〈こわごりははだし〉あたりまえですね。〈右に花さく〉〈大風がふけば桶屋が喜ぶ〉あたりまえとか、無理とか、意外とかの論理。〈右をふめば左が上る〉〈大同小異〉
わがままな論理があります。

〈二度あることは三度ある〉〈三度目の正直〉〈三度目に注意しよう〉。
〈長所は短所〉〈一長一短〉長所もあれば短所もあります。〈過ぎたるは、なお及ばざるがごとく〉
矛盾などをぶくむわがままな論理があります。

〈帯に短し、たすきに長し〉〈針小棒大〉〈中途半端とかおおげさとかの矛盾〉。
〈五十歩百歩〉〈中途半端とかおおげさとかかちがいないとかの矛盾〉。
〈月とすっぽん〉〈雲泥の差〉似ているように思えたけれどちがうのです。〈水と油〉別のものなのです。

矛盾などをぶくむわがままな論理。
〈二兎を追う者は一兎をも得ず〉〈あぶりはち取らず〉あれもこれもと欲ばり失敗。〈一挙両得〉〈一石二鳥〉かかぬをききこめてくくく都合よく得がらえた。

あれもこれもは都合よくくくくきと失敗するきかある。
〈わたりに船〉〈乗りかかった船〉都合のよいくきや行きがかりのき。
あれもこれもはくくく都合よくくくくか。

〈大は小をかねる〉〈氷山の一角〉〈大きいものから小さいものを見る〉。〈すすめのなみだく〉〈ねこの額〉ほとんちやうやうせまう。大きいものから小さい

さいものをみるとか、ほんのちよつと、とてもせまい。
以上、ちまねまな論理です。よいんぐ。

ご縁

〈しじの子落し〉〈若いときの苦労は買ってでもせよ〉子どもや若いときの苦労は大切なのだ。〈健全なる精神は健全なる身体に宿る〉人はパンのみにて生きるものにあらず。健康な身体も健康な精神も大切だ。子どもや若いときに健康な身体と精神をいへた。

〈三つ子のたましい百まで〉〈すすめ百までおどろわすれず〉人生は子どもどものまです。〈六十の手習い〉〈大器晩成〉年をとって力のつくこともある。子どもどものときにもまる人生も年とって力のつくこともある。

〈自業自得〉〈身から出たさび〉あなたのふだんの生活が悪いのです。

〈氏より育ち〉

最後まで意義のある一生も、いへに子どもや若いときどう育つかが問題。

〈なくて七くせ〉〈宝の持ちぐさわ〉〈芸は身を助く〉自分にあるそれなりの芸を大切に。〈天は二物をあたえず〉〈好きこそ物の上手なれ〉へたは上手のもと〉〈へたの横好き〉好きならいつかは上手になるのか。〈枯れ木も山のさわい〉好きならそれなりの才能でいざわつか。自分がそれなりに好きな芸をいかに。

子どもや若いときどう育ち、それなりに好きな芸をいかにいかに。

〈かえるの子はかえる〉〈瓜のつるになすびはならぬ〉結局、親と同じような大人になる。〈親の心、子知らず〉〈子を持つて知る親の恩〉子は親にならなければ、親の心がわからない。子は結局、親に似るが、それまで親の心がわからぬ。

〈寝る子は育つ〉〈親ばか子ばか〉〈総領の甚六〉家族とくにはじめの子は甘くなるのかなあ。〈老いては子に従え〉子どもから老人まで家族はほのぼの。

ああ家族。子が親の心を、など、わかっているないこともある。

〈天に向ってつばをはく〉〈うそをいえば地獄へ行く〉正直に人を思って生きたほうがいいよ。

〈うそから出たまじく〉〈ひょうたんから駒〉じょうだんがほんとうになるじつもある。〈えびでたいをつる〉〈わざわいを転じて福となす〉わざわいが多くても、大きな福が返ることもある。人生には意外な展開もある。

〈四苦八苦〉〈七転八倒〉人生は苦なのです。〈苦あれば楽あり、楽あれば苦あり〉〈楽あれば苦あり、苦あれば楽あり〉苦も楽もある人生。〈上の坂あれば下

り坂ありく〈捨てる神あれば拾う神ありく〉人生は捨てられたり拾われたり良くなったり悪くなったり。人生は苦なのか、楽もあるのか。

苦楽の人生、意外な展開もあるか。

正直に家族や人を思い意外な人生もあるか。

どう育ち家族や人をどう思い意外な人生をひきよせるか。

〈内弁慶〉〈芋の煮えたもこ存じない〉〈亭主の好きな赤烏帽子〉世間を知らない狭い家族のなかのじつ。〈年寄りの冷や水〉〈年寄りと仏壇は置きどころがない〉無理をする年寄りをそまじにもできずあつかいにこまることもあめ。

親はなくとも子は育つく〈子どもは風の子〉〈負つた子に教えられて浅瀬をわたる〉子どもは意外にしっかりしている。〈子はかすがい〉〈子どものけんかに親が出る〉〈遠くの親類より近くの他人〉家族はみだれながらもなんとか続きます。

律義者の子だくさん〈親孝行したいじつは親はなく子どもと親からなる、家族のあれやこれや。親の光は七光り〉とびがたかを生む親が有名か子がすべれているか、そんな親子もある。

家族になんだかんだがあります。

〈知らぬが仏〉

狭い家族などになんだかんだがあっても知らなれていないことがあるかもしれませぬ。

どう育ち家族や人とどうつきあひよりひろい人生をひきよせるか。

どらの威を借るきつね〈頭かくしてしりかへずくうまく見せかけたつもりでもだめ。〉〈口と腹はちがう〉〈目は口ほどに物をいう〉口だけでなく目の表現や別の腹じももある。口先や見せかけの目の表現や腹じも。

二度聞いて一度ものいえく二度教えて一度しかねく聞くこと教えることを多くものいうじつしかるじつを少く。短気は損気く口はわざわいの門くおちついて考えてからしやべったほうが多い。丸い卵も切りようで四角く物もいよいよで角が立しく丸いいかたがあるのじ。

おちついて考えよく聞きよく教え丸く言え。

かぎりがなし。目く鼻くをわらひつくくわぬのしり笑いく自分も同じようなものなのに人をばかにする。七たひさがして人をうたがえく頭の上のはえを追えくよくしやべるまえに自分で問題がありませんか。

物は相談く三人寄れば文殊の知恵く相談すれば意外な知恵も出るか。

人は見かけによらぬものく鬼の目にも涙く人は意外にやさしかったり見

かけからわからないところがある。

言いかたによく注意して相談すれば意外な知恵や発見もあるか。

〈飼い犬に手をかまれる〉〈後足で砂をかける〉〈煮え湯を飲ませる〉〈恩をあだで返す〉〈恩や信頼を知らないひどい人もいるもんだ。〉〈うらず口をたたく〉

〈はっても黒豆〉〈負けやまちがいをみとめられない人。〉〈木で鼻をくぐる〉
恩や信頼や現実の社会から孤立してしまう人もいる。

〈ぼつずにくけりゃ袈裟までくく〉〈ひじ鉄砲を食わす〉〈恩や信頼や現実がわからない人ともつきあってく〉。

目の表現や言いかたに注意しあらゆる人と相談すれば意外な腹づもりの発見や知恵もあるか。

〈目を落す〉〈顔色をうかがう〉〈相手の顔をまともに見ず、顔色をうかがう。〉

〈目くじらを立てる〉〈耳が痛い〉〈なみだをのむ〉〈胸がつぶれる〉〈はらわたがちぎれる〉なみだをのみ、胸がつぶれ、はらわたがちぎれる。〈肝をつぶす〉

〈へそを曲げる〉〈腹の虫がおさまらない〉〈腹やへそがどうにもおちつかない。〉
なみだ、胸、肝、へそ、はらわたの異変。へそが茶をわかす〉からだのなが

が動いています。

顔やからだのなかによる人間関係。
目や顔や言いかたやからだのなかに注意してあらゆる人と相談し意外な関係を生む。

〈蛇の道は蛇〉〈かにはじりひりにせく穴をほく〉それなりの情報や行動があります。

〈夢食う虫も好き好き〉〈同病相あわれむ〉〈同じ穴のむじな〉〈同じ苦しみ悩みの者どうしとわかりあう。〉
苦しみ悩みや好みはそれぞれ同じ者どうしがわか

らあひ。

〈一寸の虫にも五分のたましい〉〈さしよひは小粒でもびらりとからい〉
小

さく弱そうでもあなごれない。〉〈仏の顔も三度〉〈無理は三度〉〈なぶればうさぎも食いつく〉おとなしい人でもがまんの限界というものがあります。〉
ねじをかむ〉

弱い者でも追いつめられたらするや強。

〈引かれ者の小唄〉〈まめの歯ぎしり〉弱く負けた者が歯ぎしりしたり小唄をうたったり。

〈苦しいときの神だのみ〉〈いわしの頭も信心から〉〈おぼれる者はわらをもつかむ〉人は何にでもすがることがあります。〉
地獄で仏に会ったよう〉人は何にでもすがり、思わず助けを求めます。

〈ならぬ堪忍するが堪忍〉〈窮すは通ひ〉〈なひなる堪忍のなかから切りぬ

ことばをくりかえし聞き読みすることが大切です。〈論語読みの論語知らず〉〈論よ
り証拠〉〈百聞は一見にしかず〉論や百聞より証拠や一見を大切にす。〈机上
の空論〉〈畳の上の水練〉〈京の夢大阪の夢〉現実を知らずに夢をみていてよ
いかい。

現実を知って論語などを理解する。ことばのくりかえしも、現実を知ること
も、大切にす。

〈へたの考え休むにたのしく〉聞かぬは一時のはじ、聞かぬは一生のはじ
へたな考えはやめ、聞かぬべきことばはすく聞かぬことば。

〈馬には乗ってみよ、人には添ってみよ〉あぶない橋も一度はわたれくや
ってみないと、つきあってみないと、ものごとや人のことはわからない。へ
たな鉄砲も数うちや当るくへたでもやってみて、つきあってみて、ものごとや
のことを知る。〈当ってくだけるく〉案ずるより産むがやすく思いきってやっ
てみるのがよい。〈まかぬ種は生えぬ〉やってみなければはじまらない。

やってみてつきあってみて事実を知る。

〈うそも方便〉花よりだんじ、現実を優先する場合もある。〈鬼の居ぬ間に
洗濯〉現実をどうおちつかせるか。

〈ねじにかつおぶし〉ねじを追うより魚をのけよ、必然を思い根本を正せ。
事実を知り現実の必然をどうおちつかせるか。

ことばも大切にす、現実をおちつかせることも大切にす。

〈名物にうまいものなし〉へはやりものはすたりもの、有名だから良いとは
かぎらぬ。〈羊頭狗肉〉絵にかいたもちく、仏作ってたましい入れずく、山高
きがゆえにだつとからずくかたちだけよく実質がおろそかになっていませんか。
かたちとか有名とかでなく実質が大切。

ことばも大切にす、現実や実質を大切にす。

〈一期一会〉情けは人のためならず、人生をかけた出会いと情けがまわる
社会。〈物いへばくちびる寒し秋の風〉実るほど頭の下る稲穂かな、社会の情
けと出会いが深くわかるあなたか、腰の低い人。

〈親しき仲にも礼儀あり〉礼も過ぐれば無礼になる、自然な礼儀が大切だ。

〈類は友を呼ぶ〉朱に交れば赤くなる、仲間つきあいをするか。〈魚心
あれば水心〉水を得た魚、水と魚のよじりしつりした関係。自然な礼儀の
あるしつりした仲間つきあいを。

〈あばたもえくぼ〉文はやりたし書く手は持たず、ほれてしまつてどうし
よう。〈縁は異なるもの味なもの〉袖ふりあうも他生の縁、縁や出会いの不思議
さを大切に。〈牛に引かれて善光寺参る〉旅は道連れ世は情けく、旅のはじは
かきすて、旅で助けあひつりもあはれはじをかきすてつりもある。旅からは恋

くうでが上るくううでをぶらぶらするくううでを上げてぶらぶらしたい。く肩をならべるく
だれかと肩をならべろめいめいうでを上げてぶらぶらしたい。
すべれてしまえてきる状態までになりたう。

くシールをしくく水をめけるく山を越すくものことや競争の進みぐあい。
く腹を決めるく足が地につくく足が地につき腹を決める。ものことや競争を
どし着実に進めるか。

く目をつけるく目的を射るく目をつける目的を射る。く手を打つくく手を回すく手
を広げるく手を打ち、手を回す、手を広げてく。く目をつけるから手を広げる
まで。く手を切るく目をつけるからうう手をしなぐかまぐ。

く一網打尽く火ぶたを切るく一網打尽く、火ぶたを切るか。
ものことやただかいをどう進めるか。

成功にどう備えるか。
世の中とのなめらかな縁をめぐらし成功に備える。

ことばも大切にしつつ、現実とのなめらかな縁にて成功に備える。

く顔が利くく顔が広いく顔が利き、顔が広い。く顔がつぶれるく顔にどろ
をぬるく顔がつぶれたり、どろをぬられたり。顔を大切にす日本社会か。く口
がかたいく口がすべるく口が、かたいか、すべるか。く口が重いくく口が軽いく
あまりしゃべらないか、ひみつまでしゃべるか。しゃべらない口か、ひみつを
まもれる口か。顔とひみつを大切にす社会か。

く鬼も十八、番茶も出花く夜目遠目笠の内く女性はどういうときに美
くみえるか。く十人十色く人にはそれぞれな面がある。社会にあるそれぞれな顔。

くお茶をにごすく油を売るく時間をつぶすくその場をこまかしてします。く
どもと過ぎれば熱さをわすれるくくわいものにぶたをするく現実をみなかっ
たりわすれたりする。くあつは野となれ山となれくだらしないころの人も
く。

く大ぶろしきを広げるく逃した魚は大きいく実際より大げさに言っしま
うことがある。く一事が万事く社会には問題な人もいます。

くかべに耳ありしやうじに目ありく付和雷同く船頭多へして船山のぼるく
社会がしつかりした意見でまよまよならくじやがある。

社会にさまざまな顔があり社会がまよまよならくじやもある。
社会にさまざまな顔があり社会がまよまよならくじやもある。

く呉越同舟く犬猿の仲も呉越同舟も。社会のさまざまな顔が
まよまよならくじやまよまよるじや。

くえんの下の力持ちくじやんくの背へく一人といふ土合もある。くば
かのーしおぼえくばかじはわみは使えくじやくたええばーしおぼえのばかもな

五里霧中く一寸先はやみく先がみえませんが、悪いことは重なるく弱
り目にたたり目くなぜか悪いことばかり。後悔先に立たずくあとの祭りく終
つてしまつてからではどうしようもない。先がみえず、うまくいかないことも
ありましよう。

たなからぼたもちく残りものには福があるく思わす得することもある。
おこる平家は久しからずく弱肉強食く厳しい世の中。はだか物落
すためしなしくあしたはあしたの風がふく心配の種のない生活もよい。ど
うせ厳しい世の中、心配の種をなくすのもよい。

人間の予想や願いと別世の中、心配の種をなくすのもよい。

地震、かみなり、火事、おやじく果報は寝て待てくこわい世の中、幸運
は寝て待つ。こわいもの見たさく当るも八卦当らぬも八卦くこわい不思議に
関心あり。こわい不思議な世の中、幸運は冥想して待つ。

人間には不思議な世の中、心配の種をなくし幸運を冥想して待つ。

天災はわすれたころにやってくるく冬来たりなば春遠かりく暑さ寒さ
も彼岸までく厳しい季節もやがて去る。待てば海路の日和ありく得手に帆を揚
げるく良い風を待つて進む。良い季節や良い風を待ちましよう。秋の日はつ
るべ落しく朝焼けは雨、夕焼けは晴れく太陽の光を知る。季節・風・太陽・大地
にまかせる生活。

住めば都く

においまつたけ、味しめじく薬より養生く薬も過ぎれば毒となるく薬
に頼りすぎるな。ふくは食いたし命は惜しく良薬は口に苦く口を刺激
するものもとってみるか。食物や薬をどうするか。

病は氣からくわらひは人の薬くわらひ門は福きたるくわらひは健康
や福のもとです。腹八分目に医者いらすく茶腹も一時くひだるときはま
すいものなしく腹をどうととのえるか。からすの行水くわらひ、腹をととの
え、湯水をつかう。わらい、食物、薬、湯水。

自然にまかせ、どうわらい、食べ、住むか。

木もと竹うらく自然を知り自然にまかせ、どうわらい、食べ、住むか。
時間を大切に自然にまかせたわらいの生活の道をたぎる。

雨降って地固まるく雨後のたけのこく聞いて極楽、見て地獄く火のな
いところけむりは立たぬく大山鳴動してねずみ一びきくなにか起きてい
るのか、たいしたことはなかったのか。なにが起きているか。落ちついたか。
ひどいか。

対岸の火事くきのうは人の身、今日は我が身く自分に関係ないことと言
っておられるか。灯台もと暗く自分にも関係すべしと思つて、注意すめ。や

なぎの下のどじょうくなにが起きているか。自分でどう関係しているか。

〈やぶから棒〉〈寝耳に水〉とつせん、思いもかけず。〈ほとと豆鉄砲〉〈目を丸くする〉おどろきです。〈田ぎりだがう〉〈言語道断〉〈二の句がつけない〉ことばにならない、ことばがうっつかないほど、ひどい、あきれた。おどろき、あきれた、信じられない。とつせん、あきれた、ちょっとわからない。

〈まゆつば〉〈半信半疑〉ほんとうかどうか。〈二の足をぶむ〉確信なくためらう。〈歯が立たない〉〈手も足も出ない〉〈うちがあかない〉とつしたらよいかまりました。〈一か八か〉〈薄氷をぶむ〉思いつくあぶないかもしれないが、運にまかせてやってみる。とつしたらよいか確信をもてないのだが。

〈手をこまぬく〉〈ない知恵をしぼる〉〈物は考えよう〉なんとか考えてみるか。それなりに考えてみるか。

さて、どうしたものか。なにが起きているか。自分はどつしたものが。

〈馬脚をあらわす〉〈竜頭蛇尾〉とつもほんものでありません。

〈頭でっかちしりしぼみ〉〈やなぎに風〉〈かえるの面に水〉〈平気でやわらかく対応〉〈ぬかに釘〉〈豆腐にかすがい〉〈のれんに腕押し〉とつも手ごたえがありません。ふわりふわり手ごたえなし。〈さじを投げる〉とつにも方法や手ごたえがない。とつにも方法や手ごたえや持続性がない。とつもまともに相手とできません。

なにが起きているか。自分がどつつかかわるか。

長い時間においてなにが起きているか。自然にまかせたわらいの生活の道をとつる。

〈かめの甲より年の劫〉〈年寄り家の宝〉〈長年の経験〉とつものは大切。

〈ちりも積れば山となる〉〈長年の積み重ね〉とつものが大切。

〈不言実行〉〈いっはやす／＼、おこなうはかたし〉〈沈黙は金〉〈理屈をこねず、なすべきことを実行せよ〉〈初心わするべからず〉〈板に付く〉〈習うより慣れよ〉むかしとったきねづか〈仕事などに慣れる〉とつまでもおどろえんない。初心のままにただ実行しおとろえない技能を得る。

〈もちはもち屋〉〈ただ実行を積み重ねた専門家を尊重する〉。

〈かっぱの川流れ〉〈さびるも木から落ちぬ〉〈上手の手から水がもれる〉〈弘法にも筆の誤り〉達人にも失敗はある。〈紺屋の白ばかま〉〈医者の不養生〉〈自分のごとはわすれる専門家〉〈なんでもこいに名人なし〉〈欠けない名人や達人や専門家というのではない〉。

ただ実行を積み重ねた欠けもある専門家を尊重する。

〈思う念力、岩をも通す〉〈石の上にも三年〉とつか願いはかなうものです。

〈心機一転〉〈背に腹はかえられぬ〉腹からの決断。いつか腹からの願いがかな

なう。〈鬼に金棒〉いつか腹からの願いがかなうと強くかませる。

〈先んずれば人を制す〉〈コロンブスの卵〉先に思いつき行動することが大切。新しい腹からの願いがいつかかなうと強くかませ行動する。

〈雨だれ石をうがつ〉〈七転び八起き〉とことん努力せよ。〈虎穴に入らずんば虎子を得ず〉〈物はためし〉おそれずにやってみよう。やってみる。そしてとことん努力する。〈犬も歩けば棒に当る〉

〈るりもほりも照せば光る〉〈つめのあかをせんじて飲む〉目立つすべれた人にあやかりたいな。〈快刀乱麻を断つ〉一を聞いて十を知るすぐに問題を解決する人もいる。すぐに解決するすべれた人にあこがれる。ぶつかり努力し解決する人にあこがれる。

〈月にむら雲、花に風〉〈好事、魔多し〉良いこと好いことにはじゃまが入りやすいなあ。

努力と解決の人にあこがれていればいい、というわけでもない。

努力と解決の人にあこがれるのみでなく、自分の腹からの願いがかなうものとして行動する。

ただ実行を積み重ねた専門家を尊重しつつ自分も腹からの願いがかなうものとして行動する。

〈起死回生〉〈九死に一生を得る〉危ういのちをとらもどした。〈危機一髪〉〈前門のとら、後門のおおかみ〉危機です。〈泣き面に蜂〉危機にまつわることはあれこれです。〈君子、危うきに近寄らず〉〈言わぬが花〉危うきに近寄らず、よけいなことは言わぬ。危機を予感し、よけいなことも言わぬ。〈絶体絶命〉絶体絶命を予感し、よけいなことも言わぬ。

〈飛んで火に入る夏の虫〉〈覆水、盆に返らず〉ああ、としかえしがつかない。〈とびこ油揚げをさらわれぬ〉〈月夜に釜をぬかれぬ〉油断してさらわれた。

〈きじも鳴かずばうたれまい〉〈寝た子を起す〉よけいなことをしましたね。〈とらの尾をふむ〉〈火に油をそそぐ〉危険なことをする。油断した、よけいなことをした、危険なことをした。

〈蛇に見こまれたかえる〉〈まな板のいゝもはやどろしうともない。〉〈一難去ってまた一難〉〈青菜に塩〉ああこまった、だめだ、しょんぼり。〈あつものにこりてなますをぶく〉〈穴があったら入りたい〉自分でも人にたいしても失敗にこりています。ああ失敗、こまった、だめだ、しょんぼり。

ああ、だめだ。

なまざまなだめだ 況を予感し、さわがぬ。

だめだ 況を先に予感しつつ、他の専門家のように自分も腹からの願いをか
なえていこう。

長い時間において自然にまかせ自分も腹から願う専門家をめざしていく。先
の縁のその上にて、

道

〈故郷へ錦をかざる〉〈便りのないのはよい便り〉〈ぶじに暮しているか、い
つ成功してもどるか〉〈所かわれば品かわる〉〈郷に入っては郷に従え〉土地
によってかわる風習を大切にしよう。それぞれの土地に暮し、いつ成功して
やるか。

〈むかしはいまの鏡〉〈武士は食わねど高ようじ〉〈衣食足りて礼節を知る〉
〈金は天下の回り物〉〈ただより高いものはない〉金か天下を回り礼節を知る社会
はあるか。〈わたる世間に鬼はなし〉金か天下を回り礼節を知り鬼のいない社会
はあるか。〈水清ければ魚すまず〉〈盗人の屋敷〉〈どろぼうにも三分の道理〉〈ど
ろぼうも十年〉〈よんばつにもそれなりの合理性や苦勞がある。清すぎる社会
はまだないのかもしれない。江戸の天下泰平をならに清くする社会はまだ無理
か。

各地が交流する泰平なより清い社会はまだ無理か。

〈高みの見物〉〈赤子の手をひねる〉〈あごで使う〉〈目をぬすむ〉〈鼻であし
らう〉人にかかれて行動し、人を軽くあつかう。人を軽くみて行動し、人を使
う。〈目から鼻へぬける〉〈立て板に水〉〈口も八丁、手も八丁〉なめらかに話
し、仕事もてきばき、りこうな人。仕事がりこうにできそつだが人を軽くあや
ついてもいるか。〈裏をかく〉〈あげ足を取る〉〈あげ足を取ったり、裏をかいた
り。〉〈腹が黒い〉〈足を洗う〉りこうそつだがあやつったり悪かったり。りこう
そつだが高みからあやつった悪かったり。

〈足が棒になる〉〈労多〉〈功少〉〈骨折の損のくたびれもつけ〉〈苦勞
ばかりでした。〉〈とらぬたぬきの皮算用〉〈安物買いの銭失い〉〈へたな売り買
い。〉〈ないそではぶれぬ〉〈へたな売り買いや貧乏状態。苦勞ばかりやへたな売
り買いや貧乏状態。〉〈しわんぼうの柿の種〉〈人のふんどしですもつを取る〉〈ね
じはばをきめる〉ひそかに借りたりぬすんだり。〈我田引水〉ひそかに借りる
ぬすむ。けち。しまの自分の都合ばかりか。

〈生き馬の目を抜く〉〈無理が通れば道理が引く〉〈くまれっ子〉〈世に
はばかる〉なげかにくまれっ子とか無理とかも通用する。〈人を見たらどろぼ
うと思え〉〈地獄のたまも金〉〈金が中心の社会かなあ。金、するさ、に
くまれっ子、無理が通用してしまふ社会か。

金めあてと貧乏、無理も通用する苦勞ばかりの社会か。

組織などのなまびまなやらのごにおいて確実に柔軟にごうたたかうか。
〈笛ふけどもおどらぶ〉〈二階から目撃〉〈まへいかずもどかしい〉〈雲をつかんでなをかむく〉〈まへいきませぬ〉〈鵜のまねをするからすく〉〈おかへあがったかっぱ〉〈まねして失敗したり、場ちがいでもなにもできなかつたり。〉〈やぶをつついて蛇を出す〉〈とうにもへただったたり場ちがいだったり〉。
〈馬耳東風〉〈上の空〉〈しかの角を蜂がさす〉〈聞き流し、頭に入らず、平気か〉。〈焼け石に水〉〈働きかけても効果がな〉。〈うごの太木〉〈無用の長物〉。〈どうも役に立たない〉。〈烏合の衆〉〈まとまらず役立たず〉。〈役立たず効果なし〉。
へた、場ちがい、役立たず、効果なし。ちぐはぐ。
〈砂上の楼閣〉〈もとの木阿弥〉〈もとの状態にもどろろつ。〉
ちぐはぐとかもとの状態にもどろろつ。か。
それでも、善いこと新しいことなどを着実に柔軟にごう進めるか。

「ことわざはことばのわざです。先祖の知恵です。」

日本人がこれからの世界に生きるため、ことわざがどのよう役に立つでしょうか。

「大人向けの解説」

『生きることわざまんだらよ』に用いたことわざは冒頭にも示した、『子どもことわざ辞典』とははともだち』に収録された五六三句のすべてです。この辞典の監修者である庄司和晃先生は、柳田民俗学を研究する教育学者です。わたしは庄司先生らが小学生用を選んだことわざたちをひとつの全面的な物語につづりたいと思いました。そう想ったのは、民族地理学者の川喜田二郎先生が創始したKJ法に、わたしが若いころから関心があったからです。KJ法は、「渾沌をして語らしめる」(中央公論社『KJ法』副題) 方法です。『生きることわざまんだらよ』は、わたしなりに学んだKJ法を用い、わたしなりにことわざたちをもとに予想した、日本語の世界観・社会観・人生観の編集です。あるいは日本民衆のこころの現象学でもありましょうか。ことわざを生み育てた人々たちによる総合会議の代理でもありましょうか。

これはまた、川喜田先生がコンピュータなどの形式検索から離れ、もうひとつの大切さを訴えた、内容検索のための試みです。自然成長した渾沌としたことわざたちを内容本位に編集し、ひとりひとりが生活の今、自分自身に必要なことわざに触れやすくする。そういう試みです。

大人の皆さんにとっても案外、ことわざという先祖からの宝が、まさに、宝の持ちぐされとなっているかもしれません。ことわざについての内容検索(つまり、これが真の情報公開なのです。)が発達していなかったからでもあります。

江戸時代以前、とくに寺子屋も発達していない地域において、教育の中心はこと

わざであったかもしれない。

ことわざは、民衆が愛着をもちおぼえやすいことばのわざとして、自然に、たとえば多く使われています。コンピュータが言語の意味を扱う際、もつとも困っているのが、たとえです。まず人間が自身の認識において、内容本位の編集の苦勞をしておくことが、コンピュータをより活すためにも、かえって賢明なのではないでしょうか。

最近、日本の情報技術などは世界の進化方向から孤立しているという意味あいにおいて「ガラパゴス」とからかわれています。情報技術はその地域の文化に接近せざるをえず、日本のことわざを研究すれば「ガラパゴス」の由来と解決方向もみえるのかもしれない。

人権思想を無理なく無駄なく拡張するには、現実論としての民俗学や民族学が必要です。わたしが私淑した、庄司和晃先生・川喜田二郎先生の両先生に感謝申し上げます。

戦前の教育勅語でもない、戦後の道徳教育回避と進学塾でもない、新しい民衆教育のはじまりを、わたしは強く祈り願っております。新しい日本の社会運営を祈り願っております。

二〇一〇年八月吉日

JOMONあかのみい

やまだ
山田

まなぶ
学 ©

※KJ法をめぐる知的所有権は川喜田研究所（東京都目黒区碑文谷の1-1-9）が厳格に管理しておりますからご注意ください。